第７号　２０１０年７月　発行

鎌倉・九条の会ニュース

鎌倉・九条の会
TEL:0467-24-6596
FAX:0467-60-5410
0467-24-6577

Email:iza@kamakura9-jo.jp
HP:http://www.kamakura9-jo.jp

鎌倉・九条の会〈憲法のつどい〉渡辺治さん（一橋大学名誉教授）による講演会「日本は、いま　どこへ　行こうとしているのか！」が五月十七日（月）、鎌倉生涯学習センター・ホールで開かれました。ホール全席をいっぱいにした参加者は、真剣に聴き入りました。

会の呼びかけ人の一人である井上ひさしさんが四月九日に亡くなられてから初めての集会となり、司会者は開会のことばで次のように述べました。「残念な思いと悲しみはつきませんが、井上さんの志を継いで進んでまいります。今日のプログラムの中に、同じ会、呼びかけ人の内橋克人さん、なだいなださんから寄せられた追悼のメッセージ（本紙八・九ページ）が入っています。どうぞお読みください。内橋さんは、いま、この会場にお見えになっています。

なお、この講演会の予定が決まったとき、井上さんは『よい企画をして下さって』と、期待しておられたと聞いております」

渡辺　治さん　講演会

「日本は、いま　どこへ　行こうとしているのか！」

お話の要旨を編集部の方でまとめました。

昨年夏の総選挙の結果、鳩山民主党政権が成立し、国民のあいだに新しい政治への期待が高まった。しかし、政権の迷走でその期待は急速にしぼんでいる。普天間米軍基地を、やはり辺野古に移す方針、派遣法改正の骨抜き、後期高齢者医療制度に代わる新制度への足踏みなどで、これではいままでの自公政権と同じではないかという声が広がっている。

冒頭、このようなまえおきをしたあと、『だが、待てよ』と渡辺治さんは講演を始めました。

『昨年の総選挙で鳩山政権を生んだ国民の力が政治を新しく進めたことは否定できないと思います。確かに大きなジグザグがあります。危険な方向もいくつも見えています。しかし鳩山さんはパンドラの箱を開けました。普天間基地を国外へ、最低でも県外へ移すといったとき、自公政権ではいいもしなかった沖縄の基地の撤去縮少も，場合によっては、わたしたちの力と声によって実現できるかもしれないと多くの人が考えるようになりました。

また政治に対してあきらめてしまっている人たちに、たとえば子ども手当の半額支給という形で一歩進むと、もしかしたらわたしたちの力で福祉の政治が前進するかもしれないとの思いを抱かせました。

アメリカや財界の圧力で、鳩山政権は開けたパンドラの箱のふたを閉めようとしていますが、一度開いたふたは閉まらない、閉まったとしても、わたしたちの力が、ふたを開かせる経験を持ったという事実は、明らかに政治を前に進める力になると思います』。

渡辺さんの講演は第一章**「昨年の総選挙は日本の政治をどう変えたか」**にはいり、昨年の政治変動に見られる三つの特徴を挙げました。

第一は、選挙によって国民の力に

よって、初めて既存の保守の政治を変えた――反構造改革、反改憲の声が、政治の表舞台に集まって、自公政権を押し流したこと。

第二の特徴は、そうした声と期待が民主党に集中し、ひとり勝ちとなったこと。構造改革に徹底して反対し、改憲に一貫して反対してきた社民党や共産党にはいかなかったこと。その理由は、小選挙区制の弊害と民主党が変貌したことによる。民主党は二〇〇七年に方針を大転換し、構造改革による矛盾をただし、国民生活を第一とするという姿勢を示した。

第三の特徴は、保守二大政党制が固定化する方向にあること。国民の支持が自公政権から離れたといっても、国民の7割が日本で保守政党を名のる自民党と民主党に投票し続けていることに変わりなかった。

渡辺さんは語ります。『自民党と民主党七割のお風呂に国民は入っている。このお風呂の中で構造改革で熱すぎてくると、ちょっとぬるいほうに移動しますが、同じお風呂の中でまわっているんです。社民党、共産党の反構造改革のお風呂は一一・三%と小さいものです。このまま民主党の迷走が続きますと、人びとは大きなお風呂のうち自民党のお湯のほうへ移動しかねません。

新しい政治の第一歩を踏み出したといっても、以上のような三つの特徴から考えると、今後日本の政治を構造改革にスットプをかけ、国民生活第一、憲法を生かし平和構築の方向へ向かわせるのか、それとも再び、構造改革の方向へ、また改憲の方向へいかせてしまうのかは、わたしたちの戦いにかかっていると思います』。

渡辺さんの講演は第二章**「なぜ民主党は大勝したか」**に移り、民主党の変貌ぶりを次のように概観します。

民主党はもともと保守第二政党として期待されて育ってきた。一九九八年の参院選で構造改革のはしりを手がけた橋本自民党が大敗した結果、保守支配層は民主党の育成を決断、構造改革を進め、軍事大国化を自民党と競い合う政党としての成長を期待した。

そうはいっても、自民党と違うところを示さなければ票は入らないから、民主党は違いを次のように強調した。――地方へ公共投資をばらまく利益誘導型政治をやってきた自民党では本当の構造改革はできない。大企業の国際競争力を強めるために、大都市を拠点とする民主党だからこそ、血の出るような構造改革ができる――。

国際貢献ということについても、自民党とは違い、国連の旗の下でおこなう、国連決議の下、自衛隊を海外派兵するには改憲が必要・・・いわばマイルドな軍事大国化を目指す。

急進的な構造改革とマイルドな軍事大国化路線をいきながら、民主党は選挙のたびに伸びてきた。ところが自民党の構造改革による経済・社会の歪みがはっきりしてきた二〇〇六年ごろから、民主党の対応は変わり、〇七年参院選マニフェストでは急角度の路線転換が見られた。

渡辺さんは次のように説明します。

『まるで反構造改革の党に変わったように見える〇七年参院選の小沢マニフェストには、最低賃金の引き上げ、非正規雇用の問題などの深刻化に伴う、若者の雇用就労困難を支援する、月額二六、〇〇〇円の子ども手当て、公立高校授業料無償化、農家個別所得保障などが盛り込まれました。

軍事力による国際貢献の問題についても、イラク駐留の自衛隊の即時撤退、インド洋における給油活動継続反対、さらには基地負担軽減のため在日米軍のあり方再検討などが盛り込まれました』。

このような〇七年民主党の急転換を促した要因を渡辺さんは、三つ挙げました。

第一の要因（1）小泉構造改革はいままでの日本企業のあり方では経済のグローバル化に勝てないとして、リストラ、派遣労働自由化、地方への公共投資を三位一体改革で切り捨て、さらに社会保障を後期高齢者医療制度や障害者自立支援制度に見られるように切り下げるなどの施策をおこない、貧困格差を増大させ、生活不安、自殺増、ネットカフェ難民などの問題を顕在化させた。こうした事態に直面して反貧困のたたかいが起き、「年越し派遣村」のように、市民運動と労働運動が手を結び、労働組合のナショナルセンターも共同

歩調をとるというような活動が活発化した。

（2）九〇年代に入って日本政府の改憲志向は強まっていくが、歴然と改憲を打ち出せずにきた。小泉内閣のとき自衛隊をイラクに送ったが「派兵」ではなく「派遣」だという口実にせざるをえなかった。ところがアメリカの圧力と自らの偏狭なナショナリズムによって、安倍政権は任期中に改憲へ踏み出そうとする。その前提には、〇四年四月の「読売新聞」世論調査で六割の人が改憲に賛成ということがあった。

〇四年六月、先だって亡くなられた井上ひさしさんたち九人の呼びかけによって「九条の会」が発足した。スタートから一年、全国に二〇〇〇の九条の会が生まれ、現在は七五〇〇ほどになっている。九条の会が広がっていくにつれて、国民世論も変わり、〇八年になると、「読売新聞」の調査で、改憲賛成派が四二％反対が四三％と逆転している。

民主党の改憲志向に動揺を与えた九条の会の全国的広がりについて述べた渡辺さんは、九条の会の三つの新しさを次のように語りました。

『これまでの改憲反対運動は主として革新の人たちによっておこなわれてきましたが、九条の会の運動は保守の一部を含めた結集です。宮城県に首長九条の会というのがあって、市町村長の現職と元職をあわせた十六人が集まっています。また新潟県加茂市の市長さんは、元自衛官ですが、九条の会の呼びかけ人になっています。そのわけは自衛隊のプライドを守るためというのです。自衛隊は国民のいのちを守るためのもので、九条を変えて人を殺す軍隊として海外へ出ていくようなことになってはならないというのです。

二つ目の新しさは、九条の会の運動の積極的担い手が中高年の人たちであることです。この人たちにとって、自分たちが銃を取らなければならなくなるという話ではありません。戦争で軍隊が人を殺すことなくきた戦後日本を今後も続けていきたいという気持ちからのことです。そして、企業や公共部門を退いてもエネルギーがあり、九条の会で力を出していきたいということがあると思います。

三つ目の新しさは、九条の会はいままでの社会運動と違って、団体組織が中心でなく、個人のイニシアティブで成り立っていることです。ですから全国に七五〇〇あるといわれてる九条の会にひとつとして同じ会はありません。そして、それらを指導する司令塔もありません。ネットワーク型の運動です』。

このような九条の会の広がりが、民主党の改憲への積極的な姿勢を変えさせ、二〇〇九年マニフェストでは、憲法三原則は国民の確信によって支えられているという一方で、自由闊達な論議をうながすというふうにはっきりしない表現に変わったと渡辺さんは述べました。

続いて渡辺さんは、〇七年に民主党を急転換させた要因は以上のような市民の運動のほかに二つあると指摘しました。ある意味で小沢独裁であったからこそ、右から左へと急転回できたこと。アメリカのような純粋保守二大政党制にはなっておらず、民主党の左に社民党、共産党が存在していることの二つです。

渡辺さんの講演は第三章**「民主党政権の動揺とジグザグはなぜおこるのか」**へ進みます。

『政権を取った民主党が保守政党としての枠組み――日米同盟の枠、構造改革の枠から逸脱することに、アメリカと財界は苛立ちを感じ、圧力がかかります。他方、〇九年選挙運動中、鳩山さんは沖縄へ行って、普天間の基地は最低でも県外へといい、県民国民の期待を高めました。また構造改革による弊害を直してほしいという国民の望みをマニフェストに反映させました。このような二つの力のあいだで民主党は迷走します』。

こう話した渡辺さんは、民主党の迷走を生むもう一つの要因として、党自体が、本来ならば別々の政党に分かれるような、国家のあり方、政治のあり方についての考えを異にする三つの構成部分から成り立っていることを指摘します。

（a）頭に当たる部分は、鳩山、岡田、菅、仙谷氏らで、国民の反構造改革への期待、軍事大国化は否だという声を受けて自分たちは選挙に勝ったと、肌身にしみて感じている人たち。同時にこの人たちは、直接、財界やアメリカの圧力を受けてもいる。日米軍事同盟を維持し、福祉政策などではわずかながらいいことをやりながら、じっくり構造改革をすすめるという、本来の民主党へ戻ろうとしている。

（b）胴体に当たる部分は小沢派で、アメリカや財界の圧力を直接的に受けていない。小沢氏は自分の力で選挙に勝ったと思っていて国民の力に押し上げられたとは感じていない。利益誘導型政治網で、自民党構造改革が切り捨てた地方を総取りしようと考えている。百数十人の新人議員

を擁するメタボな胴体。

（c）手足に当たる多くの中堅議員たち。かれらは、〇七年参院選後、さまざまな運動――障害者自立支援法反対の運動、反貧困の市民、労働運動と手を組み、マニフェストを前進させてきた。しかし党内で力がなく、自らの福祉国家構想もないため頭の部分にお願いする。子ども手当てを実現してほしい、生活保護の母子加算を復活してほしい、公立高校授業料の無償化をしてほしいと頭に頼んで実現をはかる。頭は財界の財源問題攻撃に気を使いながら、ウンといわれたものだけが実現する。

渡辺さんはこのように指摘して、『つまり民主党というのはアメリカと財界の圧力で、右へいこうとする人、後ろにもどろうとする人、左にいこうとする人が一緒にいて、迷走状態が生じていると思います。そして、頭と胴体は日米軍事同盟、将来の改憲で一致しています』と語りました。

渡辺さんの講演は第四章に進みます。『では一体**民主党は、普天間問題、構造改革の問題、憲法の問題でどうなるか？**を次に検討しますが、そういう民主党政権のいちばん大きな象徴が、普天間だったと思います』。

もともと民主党は沖縄の基地撤去とか負担軽減とかに、あまり関心がなかったが、「基地の負担軽減」という言葉が、二〇〇七年のマニフェストで初めて出て、もっと踏み込んで書かれたのが、二〇〇八年民主党の報告書「沖縄ビジョン二〇〇八」であった。その中で、普天間基地の県外国外移転について、日米基地協定の見直し、米軍の特権の見直し、さらに沖縄の経済を立て直すためには、基地に依存した経済はダメだということまで、民主党は体系的に書いた経緯を示した渡辺さんは、『わたしは沖縄県民の今回の民主党への圧倒的な支持は、この二〇〇八年マニフェストによるところが大きかった、まさに「少なくとも第一歩を踏み出してくれる」そういう期待が集まりました』と述べます。しかし、政権を取った途端に、当然アメリカの圧力が加わり、すぐに、岡田さんや北沢さんは「転向」し、「国外移転は無理だ」といった。

『ところが鳩山さんだけは、沖縄県民のどういう気持ちを受けて自分たちが当選し、政権を担ったか、ということをよく自覚していて彼は抵抗します。鳩山さんが頑張ったのは、県民の声と運動の力だったと思います』と渡辺さんは分析します。

鳩山さんにとって、昨年十一月三日に「毎日新聞」と「琉球新報」とが合同でおこなった県民世論調査で、実に県民の七割が県外移転と国外移転、そして実に六七％の県民が名護辺野古沖移転に反対したという事実はショックだったこと。それに加えて十一月八日、九五年のあの大集会から十五年ぶりに、県民集会が持たれ、これも鳩山さんに対して大きな圧力を加えた。最後の圧力は、名護でどうしても一致できなかった民主党の市長候補と共産党派の市長候補が、初めて名護移転反対で稲嶺さんに統一したことであった。『こういうなかで鳩山さんは、少なくとも年内決着は嫌だ、ということをいいました。一方で日米同盟を変える気はありませんでしたので、鳩山さんは「トラスト・ミー」などといっていましたけれども、他方で、沖縄県民の声もやっぱり聞かなければいけないと彼は思っていた。多くの民主党の政権担当者や党の幹部の意見に反して、年内決着をはかりませんでした』。

そして一月二十四日の名護市長選挙で基地移転反対派が勝利する。

アメリカはもうカンカンである。しかしここで国民は四・二五の沖縄県民大会の一〇万人、四・一八の徳之島の一五、〇〇〇人と、大きな声をあげた。

渡辺さんは語ります。『そういう中で最後に鳩山さんを決断させたのは、「日米同盟を壊して、日米同盟のない基地のないかたちで、日本の安全は守れるのか？」鳩山さんはそれにイエスといえなかった。最後に日米同盟に戻っていった。ですから、わたしは、鳩山さんは結局のところ悩みながら、――わたしはよく悩んだと思いますけども――、結局のところ日米同盟を採っていくであろう。また基地の名護・辺野古移転を容認するであろうと思います』。

『鳩山さんはきっと政権を維持することができないでしょう。しかしそれでも、民主党がおっかなびっくりだが、提起した問題を、わたしたちは本当に国民レベルで考える必要に迫られていることが、ここで示されたと思います』。

構造改革をめぐって動揺し、どうなるか、渡辺さんの講演は続きます。

『財政問題について、大企業から負担を取るべきだ。大企業に対する負担は国内で活動する企業に同じように掛かるルールである。大企業がこれだけの大市場を捨てて外国へ逃げていくはずはありません。労働力、

社会資本、さまざまな恩恵を蒙る代わりに、社会にしかるべき負担を出すべきだが、民主党にはそれがいえない。しかも他方では二〇〇七年のマニフェストで「消費税は上げない」といってしまった』。そこで、こども手当てを数兆円出す、高校無償化をやるが、その代わりに同じ厚労省予算のなかで他の福祉費を削減する。農家戸別所得保障を出すために重要な土地改良費を切捨てる、同じように、国土交通省の予算のなかで、住宅(公営住宅の建設を含め)の建設費用は、何と麻生政権の時より七割も削減し、ほとんどなくなっている。しかしそれでも足らないので新たな支出抑制策をとらざるをえない。後期高齢者医療制度は新しい仕組みをつくる。保育についても新しい制度をつくって、支出を削減する。なぜこんなことをやるのか?結局は財源がないといって、再び構造改革に回帰していくだろうと渡辺さんは述べました。

憲法問題はどうなるか?『鳩山さんは民主党の中で最も確信を持った改憲派です。二〇〇五年にPHPで出した本で主張しています。しかし鳩山さんは、憲法を変えたくないという市民の声によって政権に着いたことを知っているため、そういう圧力を感じている以上改憲はできないでしょう』。

「憲法のつどい」を持った今日は、安倍晋三さんの唯一の遺産である改憲の国民投票を定めた改憲手続法が施行される(二〇一〇年五月十八日の)前日であるとして渡辺さんは続けます。『安倍さんの唯一の遺産であり国会で強行採決させた改憲手続法が三年を経て施行される。昔の民主党であれば、自公に呼びかけて改憲の手続にはいったであろう。しかし鳩山さんは、明日に向けて何もできない。わたしたちも何もさせない。ならば、憲法問題は安心なのか?そうではありません』。アメリカはオバマ政権になってから、ブッシュ政権以上に強い圧力をかけてきている。『まずいことに、鳩山さんはアメリカに負い目を負ったと考えている。そのため必ず、選挙後に自衛隊恒久法という形で出してくるでしょう』。その布石として、五月十四日、国会に国会改正法案が提出された。そういう意味で、憲法問題も大きな岐路にさしかかっている。『こうみてくると、民主党政権はどこが良かったのか?ということになる。しかしいろいろ不十分な点はあったが、子ども手当てや核密約の公開だとか、問題を提起し、運動と力によってはそういうことができるということを示しました。国民が頑張ればもっと前進することもできるという、パンドラの箱を開けたということは自公政治のもとではなかったことです』。

憲法九条と二五条の力が、いま政治を大きく動かそうとしているとして渡辺さんは最終章に入ります。『しかし問題は、九条の会は中高年が主体であり、若干疲れてきました。率直にいって、マアここは9の日行動でなくても大丈夫ではないか?力を蓄えて、また危険な動きが出れば頑張るさ、と一服感がでてきた。しかし中高年が主体だと威張ってはいられません。リストラといまの不況に苦しむなかで、若い人たちが苦闘している。二五条の運動は二十代、三十代の運動である。ですから、そういう意味でいうと、二十代、三十代ー、六十代、七十代ー、車の両輪のように政治を前進させてきています。あとは間の現役の人たちにどうやって立ち上がってもらったらよいか?に係っている』。

九条は、国家に軍事力を行使してはならない、という禁止する規定なのだから、政府を取らなくても、私たちの運動と声によって、自衛隊を海外に出動させない、海外から帰ってこさせるということができた。ところが二五条はもっとたいへんで、守っているだけでは役に立たない。二五条を実現するには、九条とは違った努力が必要だ。国家がサボッてしまったらどんなに反貧困の取り組みをやれといっても、政治が黙っていたらできない。

『民主党は、新しい政治の第一歩だけでも進めようとしましたが、財界の圧力で構造改革の方に戻ろうとしている。政治をもう一段、前進させる力が必要だと思います。そのためには、日本の、二十一世紀のこれからの道を、わたしたちが代案をつくって、そして示していくことが大事であると思います』。

『二〇〇四年に、九人の呼びかけ人のもとで九条の会をつくり、わたしは事務局に入りました。その時から井上さんとお付き合いをしています。』

『一番印象にのこっているのは（昨年）十一月二十三日の、九条の会セミナーのことです。

九条の会セミナーというのは、呼びかけ人と別の人とが組んで講演会をおこなうもので、福井に行くことになっていましたが、井上さんが「癌の治療で行かれない」という連絡が入った。まさか僕一人ではできません。そのときに大江健三郎さんが「わたしがやりましょう」と引き受けてくれた。大江さんは「山形での借りがあるから」といって、引き受けてくれました。十一月二十三日にわたしが今日のように力んで話したあとに大江さんが出て話してくれました。お話のなかでわたしは「なるほど」と解りました』。

一年近く前に、大江さんがたまたま自宅にいて井上さんからの電話を受けた・・・、大江さんが「どうしたの？」といったら井上さんはギョッとした声で、「これから一〇分後に大江さんの講演が始まります」といった。そうして、井上さんは、とっさのことだがその講演の代役引き受けてくれた。――「山形での借り」の転末はそういうことだった。と渡辺さんはいいます。そして、講演を次のように結びました。

『井上さんがこんな事態になるとは思っていませんでした。井上さんも思っていなかったし、わたしも思っていなかった。井上さんの志を継いで、井上さんは七十六歳でわたしは六十三歳で、ちょっと疲れてはいるがまだまだ頑張って歩いていかなくてはならないと思っています。わたしたちが、ひと休みすると改憲賛成が九ポイント上がってしまうことを考えて、ここは鳩山さんが悩んでいたところからさらに一歩前進するため、ガンバロウということを訴え、話を終わりとします』。

多くの質問状に答えて

回答部分のみ

1、マスコミの問題

『たしかに大きな問題です。財界の圧力についてのご質問もあったのですが、財界の中でも日本経団連は政治資金を給与する団体であり、報告書をいろいろ出していて、大体の政府の審査会にもメンバーが入っていて、そういう報告書で日本経団連の要求しているものがインターネットで自由に読めます。それからすると、マスコミは大きくいって日米同盟と構造改革を推進するかたちで、財界の論調とたしかに似ています。マスコミの指導部の人たちがそういう考えで世論を誘導しています』。

現場が沖縄を取材したとする。マスコミ人は取材を通し日米同盟がどんなに異常か、それなりに解っている。だがその取材記事が上に挙がっていき幹部の人が読んで、「そうであっても日米同盟が大事だ」ということになってしまう。『ですから、日米同盟がない日本の安全ということを本当に考えることができるかを、政治が全体として考えていく必要がある』と強調。

2、新党の乱立

民主党のジグザグの中でいくつも新党がうまれた。『自民党から分かれた「みんなの党」は支持一〇％を維持している。他方、自民党の支持は増えていない。それだけ国民は経験を積んできている。自公の枠には戻りたくない。そこで新党が注目される。新党はいずれも皆、改憲、構造改革、公務員リストラ、消費税アップで一致している。自民、民主から離れた国民を保守のお風呂に留めるのが新党だ。国民は経験をしなくては前に進めないのであり、一つひとつ味を見て試行錯誤を繰り返すしかありません』。

3、小沢さんが何で強いのか

『自民党の利益誘導型政治を民主党が選挙目当てでもって押し付けている。いくつもの利益団体が余りにも露骨な形で変わっていく』、小沢全盛に見えるが、大きな弱点がある。何かというと小沢さんのやり方というのは、国民を信頼していないこと。『総選挙を鳩山さんで大きく勝ったのは小沢さんの力ではありません。だが本人は金の力で政治を動かせると固く信じて、政治と金を絶対に手放さない』。

4、小選挙区制

一五〇年近く経たイギリスでさえ小選挙区制を否定する「自由民主党」（日本では民主党に近い）がでてきています。

民主党は衆議院の八〇をつぶそうといっている。『邪魔なのは比例で、一八〇を一〇〇にしてしまう。現在の得票では、共産党は一～二議席、社民党は〇、公明党一〇に。民主党の専制を目指し日本を最も悪い方向に導く。小沢民主党ならば必ず出し

てきてそれを自民党が支持する。憲法の改定につながり、日本の民主主義をだめにするので絶対に反対しなくてはなりません』。

5、軍隊がなくて平和は可能なのか？

『かなりの人が考えている。軍事力が大きいから日本の安全は保たれていると考える方がかなりいらっしゃるが、わたしはそんなことはないと思っています』。『それではお前は、北朝鮮や中国が日本に攻めてくることはないというのか？わたしは北朝鮮が日本を攻撃する可能性は一つだけあると思います。それは北朝鮮がアメリカと日本に攻められたときである。北朝鮮は戦前の日本と同じ軍事国家であるが、日本と違うのは、非常に小さな軍事専制国家であるということ。国家予算は日本の国民所得の二六〇分の一であり、足立区と大体同じ、しかもその軍隊は陸軍中心である。その軍隊はアメリカに侵攻されたときに体を張って抵抗、三八度線を前線に身を挺して戦うため。お金がないから国民を飢えさせながらでも核で装備し、アメリカの攻撃を防ごうとしている。この状態で北朝鮮が日本を反撃するのはアメリカ軍が北朝鮮を攻めるときである』。しかしそれには九条改憲が不可欠だ。『ですから、日米同盟共同作戦であんな専制国家は力でつぶしてしまえということに賛成の人は、憲法を変えなくてはならない。北朝鮮が日本を侵略することは、やろうとしてもできないでしょう』。したがって私たちが先制攻撃したときしか北朝鮮が日本を攻めてくることはないだろう。

6、九条の会をどうするのか

『たくさんのご質問が出ております。若い人たちが、どうやって参加していくのか？切実な課題です。一言でいえば、われわれは助けることしかできない。手取り足取りはできない。立ち上がるのは若い人たち自身であり、一人一人の若い人自身が、どうやったらよいかを考えていくしかない』、『九条の会を長く続ける、それには面白くなくては続かない。皆で話して、「自分はこう考えていたけど、こんなことを学んだ」、「こんなことを話したが、説得できなかった」ということを積み重ねる。皆さんが学ぶことができる会にしていくことが大切。

七五〇〇の、いろいろな九条の会が違った顔で働きかけていくことを期待して、わたしの答えを終わりたいと思います』。

参加者の感想

多くの感想をありがとうございます。いくつかを紹介します。

＊大変わかりやすく、そしていままでわからなかった情勢が理解できました。わたしたちもわからないという思いを、そのままにせず、理解する努力をし続ける必要があると思いました。（６０代・女性）

＊渡辺さんの講演は、今の民主党政権の状況についてわかりやすく説明され、いま、わたしたちが何をすればよいか提示されたように思います。９条だけではなく２５条、快適な生活を保障することが、政策の両輪であるという印象を受けました。単なる鳩山政権の批判ではなく、自民党政権への後戻りでない模索を続け、新しい日本を築いていくことを感じました。

（６０代・男性）

＊民主政権が望まれて生まれた政権だとの認識が今までなかった。自民党との二者択一の結果と考えていたので、渡辺先生のご意見は新鮮だった。今日の講演で、現在の民主党のチグハグな政治の状態（頭、体、手足）を理解できた気がするが、これは多くの国民に見えていない部分だと思う。このような状態が続くことは、国民の政治不信につながり、せっかく昨年の衆議院選挙で国民が政治に対し熱くなってきた矢先の民主支持率ダウンにつながっている。このチグハグを一本化できないのは、やはり悩みすぎている鳩山首相のリーダーシップのなさに帰結するのではないか。

（５０代・女性）

＊いまの政治がすごくわかりやすく、少しいまの日本が知れた気がします。もっともっと自分から知ろうとしないと、お風呂に入ったままだとだめだと気づきました。

（２０代・男性）

＊昨秋の政権交代で、政治の変化に大きな期待を抱きましたが、このところの沖縄基地問題をめぐる鳩山首相の言動に失望しかけていました。でも、渡辺先生の「パンドラの箱が開いた」は衝撃でした。否定論理からは何も生まれない、ということですね。いま、僕に何ができるのかは正直わかりませんが〝多事争論〟しながら、しっかり考え、行動していきます。

（４０代・　男性）

井上ひさしさんの志を受け継いで

鎌倉･九条の会呼びかけ人の
なだいなださんからのメッセージ

井上ひさしさんを悼みます

井上さんの死は、われわれにとって本当に大きな痛手です。八幡宮の大銀杏に倒れられたような気持ちです。

でも立ち止まって、悲しんでばかりいられません。

前に進みましょう。井上さんのようにユーモアを忘れず、やさしさを失わず、しなやかに闘いましょう。

沖縄の米軍基地が、今ほど注目を集めているときはありません。環境破壊の面からも、この問題を見つめていきましょう。

そして、沖縄の人たちと連帯して、基地をなくしていきましょう。

２０１０年5月１４日　　なだ　いなだ

鎌倉・九条の会呼びかけ人内橋克人さんが出演されたＮＨＫラジオ番組を紹介します。

「ラジオあさいちばん・井上ひさしさんを悼んで…」2010年4月13日放送

●内橋さんおはようございます。日本の戦後史に大きな足跡を刻んだ大きな存在、また、ひとつ消えましたね。多くの日本人が心から悲しみ、その死を悼んでいます。

井上ひさしさんは、厖大な作品を書き続けてこられた作家というだけでなく、ひたすら人間が人間らしく生きられる社会を求めて献身を続けて来られた方です。なによりも平和であること、社会が平穏であること、人が人として遇される社会であること、そのようなあり方がどうすればこの厳しい現実のなかに実現していくことができるのか、何が、誰がどのようでなければならないのか、自ら懸命に捜し求められて、そして道筋を人々に示してこられた数少ない先達だったと思います。

井上ひさしさんという存在そのものが、私たち日本人にとっての心の基盤というのでしょうか、道路や水道などのようになくてはならない社会資本、インフラストラクチャー、心のインフラだったと思うんですね。井上さんが亡くなったことを知りましてから、ポッカリとこころに空洞が空いたままで、どうしても涙が止まらないのです。

●内橋さんと井上さんはどういう交流がおありだったのですか？

直接的には、鎌倉・九条の会の呼びかけ人としてです。井上さん、なだいなださん、そして私の３人が呼びかけ人になっていて、私の場合は、井上さんからの呼びかけて頂いたものです。鎌倉・九条の会というのは、例の全国的な九条の会の鎌倉版といえると思いますが、地元の鎌倉芸術館で大きな会合を開いているんですね。この事務局は、鎌倉・九条の会の熱心なボランティアの方たちで、夫人の井上ユリさん、それから郡司春乃さんというような方などが日常的に、熱心に奉仕活動をなさっているのです。

昨年５月末ですが、［人間が人間らしく生きられる社会を］というテーマで、湯浅誠さん、九条の会事務局長の小森陽一さん、そして私の３人で鼎談を行いました。このときも定員一千数百人に対して、それをはるかに越える大勢の人々が詰めかけられました。予約を受け始めてからすぐに満席だったということです。

（次ページへつづく）

当日は急遽、講師のいる壇上までずらりと横に椅子を並べられて、それでようやく来場者を収容できるような状況だったのです。私は何も役に立つことはできませんでね。ただ求めに応じそのようなテーマで自分の考えを話すだけという感じだったんです。

鼎談している午後７時から９時過ぎまで、井上さんはずっと見守ってくださっておりました。会が終わって控え室で歓談しましてね、そして楽屋の入口を出まして裏手からぐるっと会館の正面玄関まで回ってくるのですが、そのあたりまで夜の道を一緒にともに歩いたのです。安らぎの言葉で労ってくれました。鼎談の中で私が、「人が人として生きられる世の中とはどういうことか」その条件を5つほど挙げたのですが、その言葉を良く覚えてくれていまして、繰り返し「良かった、言葉に共感した」と具体的に口にして頂けました。忘れられない思い出になってしまいました。

「今」という時に必ずご自身で、自ら行動を起こされるんですね。「そんなたいそうなことではないよ」といった日常の感覚の中で行動を起こされるわけですね。ですが、底光りするようなものすごい社会批判の眼と思想性、それに胆力というものを私ははっきり感じてきました。井上さんという存在そのものが、多くの人にとっても支えだったと思うのです。

●井上ひさしさんは、厖大な著作を残されていますね。

もうすでに詳しく報じられておりますので２つだけ挙げておきたいと思います。ひとつは「吉里吉里人」です。東北の一寒村が、この日本から独立して理想の国を求め続けるという内容で、当時、大ベストセラーになりました。

数年前にこの時間で紹介したこともありますが、四国の高知県で、高知独立論が沸きあがったことがあるんです。坂本龍馬の「龍」と一両二両の「両」を兼ねて「りょう」という地域通貨まで発行しようという、フィクションではあるんですけれども、地元の高知新聞が連載しましてね。これはまさに、「吉里吉里人」の四国版を思わせるイベントだったと思います。地元の人が本当に力強く声をあげたもので、その時開かれたフォーラムに私も招かれました。おそらく井上ひさしさんの作品に学ばれたと思います。

もう一冊は、あまり知られていないと思うんですけれど、１９９５年「社史に見る太平洋戦争」という本の編者になっておられるんですね。井上さんは、会社の、たとえば１００年史や２００年史を読むのが趣味だったということです。「戦後史というのは一体どこから始めるべきか」ということがテーマだったのでしょう。あとがきに、ユーモアたっぷりにこう書かれておられるんです。

「社史というのは、大抵ピカピカツルツルのアート紙である。表紙ときたら卓球のラケットに使えそうなほど硬く分厚く、漬物石のように重い」というんですね。そして、「読書にもっともふさわしい姿勢はごろ寝だと自分は考える。しかし、社史は絶対に不向きなたぐいの書物である、寝転んでは読めない」とこう書いておられます。それに続けて、なぜ社史は面白いのかという例がまさにユーモアたっぷりに書かれているんです。ＮＨＫから読売新聞、毎日新聞などの新聞社、それから帝国ホテルに至るまで、計３４社の会社あるいは公共企業体の社史で、期間は、開戦前後から敗戦前後までにかぎってとりあげておられるんです。まあ、それは戦後っていうのは、一体いつからいうべきなのか、それを問うておられたんだと思います。

●心に残る井上さんの言葉、それはどんなことをあげられますか？

それはたくさんあるんですけれどね。多くのメディアで報じられたのでご記憶の方も多いと思いますが長い間私の心に刻み込まれてきた言葉があります。それはこういうものです。

むずかしいことをやさしく　　やさしいことをふかく
ふかいことをおもしろく　　おもしろいことをまじめに
まじめなことをゆかいに　　そして、ゆかいなことはあくまでゆかいに

ある出版社に参りましたら、編集室に井上さんの肉筆の原稿を額縁に入れて飾ってありました。たくさんの色鉛筆ですね。赤だけでなく緑や紫という色の入ったあの鉛筆で、何度も何度も原稿を推敲された、そういうふうな、１枚の原稿を額縁に入れて飾ってありました。

深い交流はなかったかもしれませんけれども、２歳違いの井上さんに私もまた、支えられて生きてきたとこういうふうに感じております。いま、井上さんを喪った悲しみは、いつまでも、どこまでも、もう消えることはないでしょう。

井上さんが鎌倉・九条の会で発せられた言葉の数々

２００５年6月１０日

「鎌倉・九条の会発足記念講演会」より

（井上ひさし　三木睦子　内橋克人　なだいなだ）

鎌倉芸術館大ホール　参加者１５５０名

「ある日一斉に手をつないで立ち上がる時が、来なければよいが、来るかもしれません。・・・これから明るく、楽しく、面白く、憲法を考えながら、事があった時は『いざ鎌倉』という言葉もあるくらいで、暗くなく頑張りましょう。」

２００６年7月１６日･１７日

井上ひさしの『憲法連続講座～憲法で創る未来～』

商工会議所地下ホール・鎌倉芸術館集会室

参加者１７０名

２００７年2月１６日

「憲法のつどい　２００７鎌倉」講演より

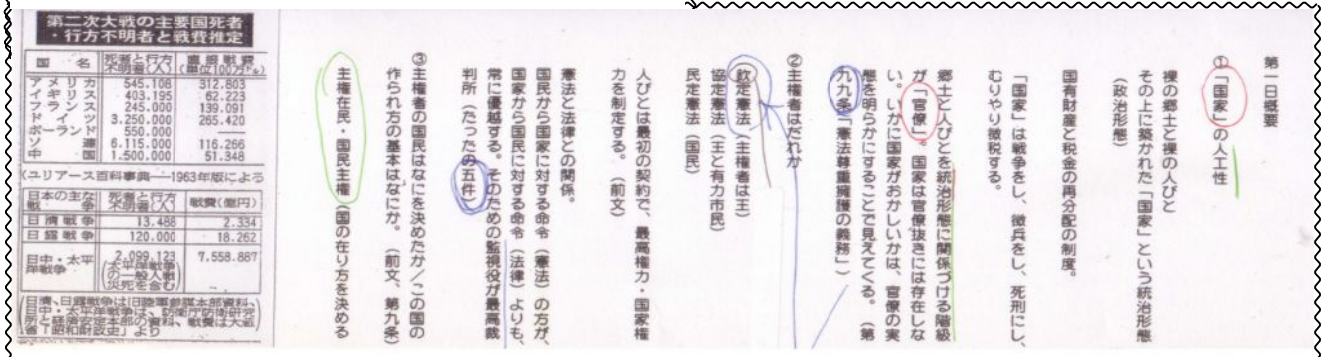
（澤地久枝　落合恵子

なだいなだ　井上ひさし）

鎌倉芸術館大ホール　参加者１４５０名

「日本国憲法九条は、ある日ひょっこり出てきたものではなく、さまざまな人類の苦しみの中から生まれてきて、当時の焼け跡の中から、ひどい暮らしの中から声をあげた人たちの声もくみ上げた、実は国連憲章の正式な息子のようなものですが、それが南極条約・海底条約・南半球の次々に行われた非核兵器条約の生みの親なんです。

これは、大きな力を持っている条文なんです。」



第二次大戦の主要国死者・行方不明者と戦費推定

国名	死者と行方不明者（人）	直接戦費（単位100万ドル）
アメリカ	545.108	312.803
イギリス	403.195	62.223
フランス	245.000	139.091
インド	3.250.000	265.420
ポーランド	550.000	——
ソ連	6.115.000	116.266
中国	1.500.000	51.348

（ユリアース百科事典——1963年版による

日本の主な戦争	死者と行方不明者（人）	戦費（億円）
日清戦争	13.488	2.334
日露戦争	120.000	18.262
日中・太平洋戦争	2.099.123（太平洋戦争の一般人戦災死を含む）	7.558.887

（日清、日露戦争は日政軍部基本部資料、日中・太平洋戦争は、防衛庁防衛研究所と経済安定本部の資料、戦費は大蔵省「昭和財政史」より

第一日概要

①「国家」の人工性

裸の郷土と裸の人びと

その上に築かれた「国家」という統治形態（政治形態）

国有財産と税金の再分配の制度。

「国家」は戦争をし、徴兵をし、死刑にし、むりやり徴税する。

郷土と人びとを統治形態に関係づける階級が「官僚」。国家は官僚抜きには存在しない。いかに国家がおかしいかは、官僚の実態を明らかにすることで見えてくる。（第九条「憲法尊重擁護の義務」）

②主権者はだれか

（欽定憲法（主権者は王）

協定憲法（王と有力市民）

民定憲法（国民）

人びとは最初の契約で、最高権力・国家権力を制定する。（前文）

憲法と法律との関係。

国民から国家に対する命令（憲法）の方が、国家から国民に対する命令（法律）よりも、常に優越する。そのための監視役が最高裁判所（たったの五件）

③主権者の国民はなにを決めたか／この国の作られ方の基本はなにか。（前文、第九条）

主権在民・国民主権（国の在り方を決める

当日の朝、ようやく出来た井上さん自作の参加者用配布資料（計9枚）

２００７年4月6日

国民投票法案緊急学習会レジュメより

鎌倉生涯学習センター

護憲勢力にもし「改正されない」という自信と戦略があるなら、あえて国民投票法案を受けて立つ手もある「改正法案否決」という事実を勝ち取ることで、九条を守るわけである。その上で、「持続可能な開発」「地球環境問題」「世界的飢餓の解消」「非核兵器地帯･無防備地区の世界化」などすべて、日本国憲法九条の下でしか解決しないことを先駆的に示す。

２００７年１１月2日

アーサー･ビナード・井上ひさしの九条対談

鎌倉芸術館小ホール　参加者６００名

「憲法の会なんていうと、みんなまじめで平和を守ろうという、その平和自体が実はつるつる言葉になっているんですね。・・・だから、もっといい言葉に置き換えて、わたしの場合は、昨日と今日と明日が続いて、多少見通しがつくこととか、それから誰かの命令で人を殺しに行くか殺されるとか、どこかへ移されるとか、そういうのは、・・・普通の市民としては、人間としては人の意見で動くのは嫌だとか・・・」

井上ひさしさんの志を受け継いで

「鎌倉・九条の会」呼びかけ人の一人、井上ひさしさんが亡くなられて一ヵ月、哀惜の思いはつのるばかりです。悲しみのなか、私たちはいま、井上さんのことばを胸に刻んで、憲法九条の意義をより深く、より広く伝えていこうと誓いを新たにいたします。

井上さんが「九条の会」で発せられたことばの数々を思い返して見ます。

○…日本人の多くが知らないうちに、日本国憲法は意外に大きな仕事をしています。軍事基地をおかない、核の実験・持ち込みを禁止するとした南極条約を皮切りに、非核兵器地帯条約が地球の南半分全体に広がりましたが。こうした国際的流れの先頭に立ったのが日本国憲法の前文です。

歴史をさかのぼってみれば、ハーグの国際会議は第一回（一八九九年）以来、戦争と暴力の二十世紀にあって、軍縮と国際紛争の平和的解決の道を模索してきましたが、百ヵ国以上、八千人の市民が参加した一九九九年の第三回会議では、「各国議会は、日本国憲法にならい、自国政府に戦争を禁止する決議をすべきである」との原則を採択しました。

東北アジアの複雑な状況下で、こうした国際的な流れをつくるのは夢物語であると言ってはなりません。憲法九条を持つ日本はあらゆる努力を重ねていくべきです。

○…わたくし（井上）が平和を言う場合は、きのうときょうとあしたが続いていて、多少見通しがつくことなどとか、だれかの命令で人を殺しに行く、殺されに行くことのないようにすることなどの意味を表すものとして、ことばを考えて使います。

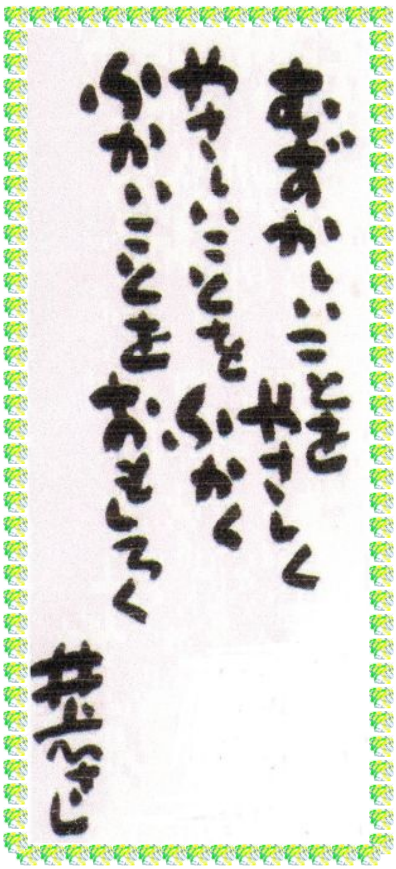
○…国民から国家に対する命令〈憲法〉の方が、国家から国民に対する命令〈法律〉よりも常に優越する。

私たちが深い感動をもって観た『父と暮らせば』について語った井上さんのことばも忘れられません。

○…あの二個の原子爆弾は、日本人の上に落とされたばかりでなく、人間の存在全体に落とされたものだと考える・・・だから、被害者意識からではなく、世界五十四億の人間の一人として、あの地獄を知っていながら『知らないふり』をすることは、なににもました罪深いことだと考えるから書く。

日本を弱肉強食の社会にし、人と人とのつながりを壊してしまう勢力や日本を戦争のできる国にしようとする勢力を、井上さんはことばの力で押し返す仕事に全力を尽くされました。井上ひさしさんという存在そのものが、私たち日本人にとっての心の基盤であるといわれるゆえんです。

しかも井上さんはその表現活動を自身の座右のことばのとおりになされました。



五年前、『鎌倉・九条の会』発足のとき、井上さんは講演を次のように締めくくりました。「これから明るく、楽しく、面白く、憲法を考えながら、ことが有ったときには、『いざ、鎌倉』という言葉もあるくらいで、暗くなく頑張りましょう。」

「鎌倉・九条の会」につどう私たち、日本各地で九条を守る活動を多彩に行っている人々は、井上さんのことばの数々に励まされて一歩一歩すすんでいきます。

昨年五月「語り合う　人間らしく生きられる社会を！」というつどいのとき、開演となって、二人のゲスト未到着、一人着席するゲストの前のマイクも故障するなか、出演者でなかった井上さんが舞台に登場、「どーも」と頭を下げ、何も言わずマイクを換えて退場されました。満員の聴衆に笑いが広がりました。その姿はいまも私たちの目に焼き付いています。これからの催しのとき、私たちは思うでしょう。何か舞台に不具合が生じると、井上さんがひょっこり袖から現れて「どーも」と言ってくれ、そのあとも舞台袖で会の進行をずっと見守ってくれているのではないか、と。

井上さん、さようならとは申し上げません。

日本国憲法を生活の中に生かし、さらに九条によって世界の人々と結び合おうと活動する日本各地の人々のそばに、井上ひさしさんがいつもいらっしゃいます。

二〇一〇年　五月

鎌倉・九条の会

憲法九条を守り、
二十五条を生かすために、
違いを超えて草の根に広がる

初めての「九条の会」関東ブロック交流会

２０１０年４月４日、東京・正則高校に集った「九条の会」関東ブロックの仲間たち。平場での「交流こそ力」―実感した一日でした。午前中の全体会で９報告のうち６人が自分の「九条の会」を語ったのも「まず自分が立ち行動する」趣旨にぴったり。最も圧巻だったのは「九条の会・千葉地方議員ネット」。「九条の会」アピールの考えを基礎にすべての地方議員の結集、会長・事務局長など長のつく役職を設けないなど無所属、民主党、共産党、社民党、新社会党、市民ネット、緑のグループなど多様な地方議員の１５％に。講演会、議員ネットの旗で街頭宣伝をしているが、各県でも必要ならノウハウを提供するとのこと。

鎌倉・九条の会はニュース、講演会資料など記録１０ページ４５０部の独自資料制作、手分けをして１０分科会の参加者に配布、話題になりました。

参加者の声

★正則高等学校校長の開会の挨拶は感動的でした。小森さんと同じ大学で熱く語り合った仲間であり、職場九条の会当時から会員ということでした。正則高校は、憲法の理念に基づき学則が作られ、差別・選別のない、体験学習を大切にする３年間持ち上がりの学校です。

その後、９つの各地・各界からの報告がありました。小森さんからの「２００４～２００９年の九条の会の運動が世論を変えてきた。９条を生かす運動が大切で、すべての問題を日常性にもどし、わたしたち主権者が憲法をかかげて活動しよう」という呼びかけで午前の全体会は結ばれました。午後は、２つの分科会と１１の分散会に分かれました。それぞれの地域での活動が話され、わたしも鎌倉の活動を話しました。ヒントになると思われるいくつかを紹介します。

第6分散会記録で全国に配信された
「鎌倉・九条の会」のグッズ

＊北区宮原中学校区――１６人くらいで１２，０００名の全戸配布し、いま７０人になりはがき通信を出している。

＊千葉県佐倉――お知らせ活動として全体で４，０００枚をみんなで配っている。４つの県立高校の門前で、会ののぼりを立ててチラシを配る。事前に教頭に話しておく。

＊詩人九条の会――４００人で発足、今年６周年。１１，０００人近くの会員の中、１割近く亡くなられた。

＊西船葛飾――定年になった女性３人で始め、「やめない、めげない」が合言葉。

＊練馬――イマジン・平和コンサート、いまの若者向きに各年で。

＊さいたま市緑区――
〈九条の会おまぎ〉目に見える活動を。見沼田んぼに九条の大看板を設置し看板を舞台の活動。春・お花見トーク、秋・憲法と文化のつどい。冬・餅つきと凧揚げ、病院前での月１度のバザー
〈三室九条の会〉参加型の取り組み。公民館は地域の交流の十字路。地区文化祭への参加。地元の皆さんの出番作り。障害者サークル、地元サークル、お笑いの皆さんの出演。
〈見沼地域九条の会〉平和を創る、文化を創る、地域を創る。地域の過半数世論へ。定例会の学習をもとに粘り強く対話。「春、平和を呼ぶ作品展」の開催と「象列車合唱団」

＊筑波大――若者をどう引き入れるか課題で集会のあとの憲法カフェ。

★交流集会に参加して印象に残ったことが２つあります。一つは小森さんのお話です。数年前改憲の世論が大きな流れになりつつあった時、「もうこれ以上じっとしてはいられない」と立ち上がった九条の会の呼びかけ人の熱い思いが、全国の人びとに届き、それが草の根の運動として広がり、改憲の流れの前に大きく立ちはだかりました。わたしたちが多数派になり、声高に９条を変えよといいにくい状況を生みだしたという点です。一人ひとりの声は小さいけれど、その声が集まったとき、政治や世論を動かす大きな力になるこ

とに確信が持てました。
もう一つは、各地の九条の会の歩みや活動報告のなかでだされた工夫や悩みです。チラシを印刷するところもない九条の会や、いろいろやってきて現在は何をしたらよいか迷っているという会もありました。さまざまな地域で自分と同じ思いでいる人びとと心の中で手を結ぶことができたように思います。
いま、改憲派の大きな動きは表立って見えにくいように思いますが、こういうときこそわたしたちもいままで以上に憲法についての理解を深め、一人でも多くの仲間を広げるために一人ひとりが自分でできることを続けていきたいものです。

憲法フェスティバル

いま、足もとから考える
育てよう平和のこころ
伝えよう憲法のこころ

今年のテーマは
〈私の憲法〉

5月22日、今年で24回目を数えるという憲法フェスティバルに初めて参加してきました。（於：神保町日本教育会館一ツ橋ホール）
第一部はピアニスト崔　善愛（チェソンエ）さんとチェリスト三宅進さんご夫妻のソロとデュエット、そして崔さんのトークでした（崔さんは留学して帰国する時、指紋押捺を拒否して再入国を許可されず、その経験を書いた著作が05年木山事務所によって「最終目的地は日本」として劇化された）。ショパンの祖国ポーランドへの思い、カザルスが戦争への抗議のためチェロを弾くことを止めたことなど語ってくださいました。カザルスが平和を願って国連で演奏したカタロニア民謡「鳥の歌」は、いつ聴いても心にしみます。
第二部は堤未果さんのお話でした。9・11以後アメリカでは大変な事態になっている、9・11の1ヵ月後には愛国者法という法律が戦時緊急事態だと急遽制定され、言論の自由が奪われ、違反すると裁判にもかけられず当事者でなくても発言したり、行動できなくなってしまった。借金漬けの国家になってしまい、大学卒業者の平均で330万、医学生は1，500万を超える借金を背負って社会にでていくという。
大切な家族・人を守ると同じように、憲法を守りたい、そのために誰でもできる7つのことやメディアを読む7つの方法などいますぐにでも実行できるヒントをいただきました。
第三部は青年劇場の俳優さんによる群読でした。1970年に花森安治さんが著した「一戔五厘の旗」はいま聞いても、そうだと思い当たるところが多く、共感しました。

井上ひさしさんの志を受け継いで
九条の会講演会
【日米安保の50年と憲法9条】
2010年6月19日（土）
日比谷公会堂

今年こそ、と参加した本家「九条の会講演会」は、「降らんでよかったわー」という遠方からのグループの声どおり晴れ間に恵まれ、開場早々にほぼ満席となりました。
開会前のDVDを見ながら聞こえる周囲の囁きに、いまさらながら井上ひさしさんの作品を愛し、人柄にひかれ、その訃報に衝撃を受けた沢山の人びとの痛みを感じました。
大江・奥平・澤地お三人の講演は、それぞれがひかれた井上さんの作品やことばから汲み取られた思い、遺志を、引き継ぐ決意が、集う人びとのうなずきの波に吸い込まれるようにも見えました。
が、この集会でわたしがしびれるほど感動したのは、講演の間で、常に変わらぬ明るくキビキビしたユリさんの挨拶と作品推薦に続いて、登

場された佐藤修三さん（山形県川西町に開校した演劇学校で井上ひさし校長のもとで教頭として演劇指導にあたる。舞台活動や市民劇場など演劇活動は４０年におよぶ。秋田県在住）による「吉里吉里人」の朗読です。

ユリさんが井上ひさしさんの「９条への深い思いが、井上ひさしのことばですべて表現されていると思います」と数ある作品の中から選ばれた、その一節が佐藤さんの声に乗った途端、不思議な感覚にとらわれました。それはもう、朗読としてではなく、佐藤さん自身のことばとして語られている、と同時に、紛れもなく井上ひさしさんのことばとして、井上さんが語っているようでした。内容の深さと重みを、じっくりじんわりと心に沁み込ませるそのことばの力にうたれ、全身が痺れたようにただ聞き入りました。

演劇も好きで、感動したことも多いのですが、このような経験はほんとうに初めてでした。

ユリさんのことばにあった井上ひさしさんの深い思いが、ゴマ粒のようなわたしにも、真っ直ぐに届けられた、といまも感じています。

二週間を経て、平和の力を発揮する憲法に拠り「日本国家の根本的な態度を、沖縄基地問題でいわれた抑止力＝軍備による脅迫ではなく、平和による共和に置き換える、そういう未来をめざし」、「名古屋高裁判決があり、２５条と密接不可分に関わるという解釈・運動も広がっている。同時に日本が９条をもつ国だという認識が、世界にも徐々に広がってきている」ことも視野に入れ、「わたしたちはまだある言論・抗議行動の自由を活かし、それを押さえようとする経済人・政治家をしのぎさらに巧妙に、したたかに、後に続くものを信じ、井上さんの志を継いで生きて行こう！」という講演への共感がジワリ広く浸透していることを、この６年間で明らかに変化したメディアの報道でも確信しました。

５月３日、憲法記念日９の日行動
シール投票「どうする？　新米軍基地」

５月の９の日行動は、憲法記念日の３日に行っています。去年からこの日にはシール投票をしています。この日は天気もよく、多くの人でにぎわっていました。投票をしてくれる人も去年の３倍近くの４２４人でした。若いカップルや家族連れもたくさん投票してくれました。投票していただいた方に憲法手帳を差し上げましたが、用意した２００冊では足りない状況でした。

鳩山首相が最低でも県外にといっていた約束を守らず、辺野古に逆戻りしたことで辞任する結果になりましたが、基地はもう要らないという人はますます増えていくでしょう。

■国内に作る		
沖縄県内	５２人	１２．３%
沖縄以外	４６人	１０．８%
■国内のどこにも作らない	２９０人	６８．４%
■わからない	３６人	８．５%
	計４２４人	

お　知　ら　せ

☆毎月の９の日行動

鎌倉・九条の会は毎月９日に鎌倉駅東口でリーフを配っています。短時間でもご一緒に！！

毎月９日　平日　　１５時～

土・日・祝日　　１１時～

小町通・鳥居前、九条の会・旗の前に集合

予告

☆勉強会

核のない世界を願い、ドキュメント映画を2本上映します。

「フラッシュ・オブ・ホープ」

「ヒバクシャとボクの旅」

２０１０年１０月２２日（金）18：30～

鎌倉生涯学習センター　第5集会室　無料

（申し込みは不要です）